

入選

「チーム医療の一端を担う喜び その瞬間」

加藤隆（協和発酵工業株式会社 医薬マーケティング部）

「ありがとう！」

そんな声を掛けられたい……。これはどんな職業であっても共通する感情ではないだろうか？人から感謝されることは心地よいものであり、誰でもやり甲斐を感じる時であろう。

私がMRの情報活動の大切さに気付かされたのは、入社5年目の頃のある中小病院の医局での出来事であった。当時は診療所を中心とした担当エリアであり、抗がん剤については名称と主要な適応症を知っている程度であったので、外科医にも面会していたが、抗がん剤の話にはならず他の内科系の薬剤の話が中心であった。そんな中、先輩MRと同行した時に第一の「瞬間」はやってきた。簡単な挨拶の後、外科医と先輩MRが少し言葉を交わしたと思ったら、初対面にも関わらず外科医は患者のカルテを持ち出してきて、先輩MRに治療方法の相談を始めたのである。これは強烈な体験であった。そこには、私には見せたことのない医師の顔があり、一人の患者さんに対峙するチーム医療の一端を担うMRの姿があった。この体験により、その後の私の考え方や行動の基本姿勢が大きく変わるようになったのである。

それから数年の後、ある医師に抗がん剤の血管外漏出対策の説明をする機会があった。抗がん剤は効果も強烈である反面副作用も強く、特に一部の抗がん剤は、血管外に漏出すれば患者さんのQOLを著しく損なう恐れのある薬剤である。こちらとしては、普段使っている薬剤の付加情報として紹介したつもりであったが、医師の反応は予想外であり、是非病院全体で説明会を実施して欲しいということになった。医師だけでなく、看護師、薬剤師も含めての40名以上を対象にした説明会である。当初はそのプレッシャーに負けそうになり学術担当者に依頼することも考えたが、自らを奮い立たせ、数々の論文・資料等の調査を経て実施するに至った。この時の気持ちも、今から思えば先輩MRによる強烈な体験がベースとなっていたのだと思う。そしてその説明会が終了した時、私にとって第二の「瞬間」が訪れたのである。自社医薬品の説明会とは全く異なる、立ち見を含む大勢の聴衆と拍手、そして感謝の言葉。私にとっては、医療関係者からチームの一端に加わる資格が許された、その瞬間であった。

その後は、いろいろなケースで同様のチャンスが巡ってくるようになった。当時急速に

進展していた院外処方において、医師とその処方箋を受け取る開局薬剤師のコミュニケーション向上を目指した合同勉強会の企画もその一つである。処方医と調剤する薬剤師が同一の施設内にある場合は、同じ医療機関のチームとして患者さんの治療にあたることができるが、院外処方となると、処方する医師と調剤する薬剤師は直接面識もなく、コミュニケーションが取れないケースも生じる。これでは患者さんを診察した医師の、「処方に込めた思い」が薬剤師には伝わり難く、チーム医療とはなり得ない恐れもある。このような事態を少しでも少なくするために、院外調剤薬局の薬剤師を対象とした処方医師による勉強会のお手伝いを推進したのである。この活動は、患者さんに対し医師の処方意図を説明する立場にある薬剤師には大変感謝され、その地域では「処方意図講演会」として一定の知名度もできた。薬剤師を通じて患者さんの役に立つことのできる一つの方法であり、チーム医療、地域医療の一端を担うことができたのではないかと考えている。

これらの出来事を振り返ってみると、ある共通点に気付かされる。それは、常に薬剤を使う患者さんの立場を念頭におき、何が必要か、何をすべきかを自問自答し、自分の行動を振り返る習慣である。患者さんの役に立ちたい、そんな気持ちは医療関係者に共通の思い。その気持ちに共感できた時、そしてその行動が習慣化して相手に認められた時に、MRは初めてチーム医療の一員となる資格ができるのではないだろうか。

現在は職務上、直接医療関係者と接する機会は無くなってしまった。そして、当然の事ながら直接感謝される機会もない。しかし、私たちが育成に関わったMRが、医療関係者から「ありがとう！」と言われる。そのことを通じて、私たちはチーム医療の一端を担うことができるかもしれない。そんな思いを紡いで、現在の仕事にやり甲斐を感じている。